「ロトとの別れ」（創世記一三章一～一八節）

1　ベテルに戻る

先週は、創世記第一二章の後半によって、飢饉を逃れてエジプトに赴いたアブラハムのことを、アブラハムが妻サラを妹と偽ったために陥った人生の危機、試練ともいうべき出来事を見たわけです。

いまその顛末を振り返ることはしませんが、それに関連して、二つのことを追加して申し上げることから、今日ははじめたいと思います。

その一つは、これは昨年ダビデを勉強したときにも申し上げたことですが、聖書は人間を、この場合アブラハムであっても、何か特別に美化するような書き方をしていないということです。ありのままを書いている。ありのままというのは、神の前におけるありのままの人間を書くという意味です。アブラハムも私どもも神の前に生きる一人の人間です。それゆえアブラハムの歩みは、私どもにとっても、信仰の父としての歩み、一つの模範ともなるのです。

もう一つは、神の主権的な関わりです。つまり他の力に動かされてではなく、神が自ら決めて自由に働くということです。

妻を妹だと偽ったことは、アブラハムに危機をもたらしました。しかしそれはたんに一人アブラハムの、あるいはその一族の危機にとどまらなかったのです。というのも、神はアブラハムを通して救いを世界に押し広げようとしていたからです。アブラハムはその神の救いの、祝福の担い手です。アブラハムの危機は、じつは神の危機でもあったのです。神はエジプト王ファラオに禍を下し、そしてサラを救い出します。アブラハムが原因で起こった危機を、神はその主権的な力を発揮して乗り越えさせたのです。

エジプトにおけるアブラハム、そこでの真の主役は彼ではなかった。主なる神が介入しその力を主権的に発揮します。そしてサラは助け出され、アブラハムの命も助かります。どのようにして助かったか、ということではなくて、神が危機を救った、アブラハムとサラを救ったという事実、これこそ、私どもが目を留め、目を離してならない聖書の真実にほかならないのです。

さて今日の聖書箇所、そのアブラハムが、ファラオによって、エジプトを、追放されて、出て行くところからはじまります。

> アブラムは、妻と共に、すべての持ち物を携え、エジプトを出て再びネゲブ地方へ上った。ロトも一緒であった。アブラムは非常に多くの家畜や金銀を持っていた。ネゲブ地方から更に、ベテルに向かって旅を続け、ベテルとアイとの間の、以前に天幕を張った所まで来た。そこは、彼が最初に祭壇を築いて主の御名を呼んだ場所であった（一～四節）。

はじめにここで確めておきたいのは、エジプトからの帰り道、アブラハムが取ったルートと到着した場所です。

エジプトを出たアブラハムは、再びネゲブ地方へ、そしてそこから更に、ベテルに向かって旅を続けたと書いてあります。そして最終的に着いたところ、旅の荷を解いたのは、ベテルとアイとの間、以前に天幕を張った所、彼が最初に祭壇を築いて主の御名を呼んだ場所でありました。

アブラハムは来た道をそのまま戻って行ったことになります。彼は彼自身の原点に帰ったと言ってよいように思います。

この帰りの旅路を「悔い改めの巡礼の旅」（ギブソン）とでも呼ぶことができると言った人がいます。そう見える旅路であったことは間違いありません。アブラハムが自分が本来居るべき場所、立つべきところへと、戻ろうとしている、それは確かなようです。彼は主なる神の言葉に従って、ハランを旅立ちました。それは異教の神々から離れることでもありました（ヨシュア二四章）。カナンに来て、その所々に、祭壇を築きます。神が現れて下さったのです。とくにこのベテルとアイの間の地では主の名を呼んだという力強い言葉を聖書は伝えています。その原点の地へと彼は戻ってきたのです。いまこうした旅程だけを見ても、アブラハムが信仰のはじまりのところに戻ろうとしていることは明らかです。まことの神、主なる神と共に、彼はもう一度生き直そうとしているのです。

2　財産と争い

しかし先ほど朗読した一～四節の中で注目すべきは、アブラハムの帰り道、その到着地だけではありません。エジプト滞在をへて、彼が非常に裕福になっていたことにも注目しなければならないのです。

先週読んだ箇所に、アブラハム一族がかつて暮らしていたハランで獲得した財産（一二・五）に加えて、エジプト王ファラオから贈られたものによって、きわめて裕福になったことが書いてありました（一二・一六）。エジプトを出るに当たってそれらの財産は剥奪されることなく、財産と「共に」追い出されたことが、一二章の終わりに書いてありました。財産を失わず、むしろ増し加えられたことは、神の祝福がエジプトでもアブラハムを離れなかったしるしと見てよいと思います。それが今日の箇所一三章一節につながっています。しかしこの財産、豊かさが、再びアブラハムの試みとなることになります。

> アブラムと共に旅をしていたロトもまた、羊や牛の群れを飼い、たくさんの天幕を持っていた。その土地は、彼らが、一緒に住むことができなかったのである。アブラムの家畜の財産が多すぎたから、一緒に住むことができなかったのである。アブラムの家畜を飼う者たちと、ロトの家畜を飼う者たちとの間に争いが起きた。そのころ、その地方にはカナン人もペリジ人も住んでいた（五～七節）。

ロトは、アブラハムの甥です。アブラハムの弟（名前はハラン）の子供です。この弟は、カルデアのウルで死んでいるので、ロトは、父が死んだとき、まだ小さかったと思われます。アブラハムは幼いロトを引き取り、自分のもとで育てます。やがてロトは成長し、おそらくエジプトにも同行し、アブラハム同様に、非常に豊かになって

いたのです。

そしてそこに争いが起きたのです。アブラハムとロトの間にではありません。「アブラムの家畜を飼う者たち」と「ロトの家畜を飼う者たちとの間に争いが起きた」のです。その理由をこの聖書箇所は、アブラハムとロト、この二つの集団が住むには土地が十分でなかったと言っています。いずれにせよ、彼らの「財産が多すぎた」からだと書いています。「財産」とは、ここではさし当たり家畜です。羊、牛、山羊などです。当然広い牧草地が必要です。そして何より豊富な水がなければなりません。定住者たちとのあつれきももちろん多くあったでしょう。それはその地方に「カナン人もペリジ人も住んでいた」という言葉によって暗示されています。争い、諍いは、定住者たちとの間であっただけではない。同族の間でも、きびしい生活であればあるほど、頻繁にくり返されていたと想像されます。そこはわれわれの牧草地だとか、水を飲むのはこっちの羊が先だとか・・・。何もこれは特別のことではなかった。またそれは、いいとか悪いの問題でもないのです。ここで生活するということに、みな必死です。ここでの生活に「争い」はつきものです。

3　アブラハムの寛容

何であれ、むろん争いは、ないに越したことはありません。起こらないように努力もしなければならない。しかし、全くない、ということはない。それより、もっと大切なことは、たとえ争いがあっても、信仰に基づいてきちんと処置できるかどうかということではないでしょうか。

アブラムはロトに言った。「わたしたちは親類どうしだ。わたしとあなたの間ではもちろん、お互いの羊飼いの間でも争うのはやめよう。あなたの前には幾らでも土地があるのだから、ここで別れようではないか。あなたが左に行くなら、わたしは右へ行こう。あなたが右に行くなら、わたしは左に行こう」（八～九節）。

アブラハムの最初の言葉、「わたしたちは親類どうしだ」、この言葉にアブラハムの思いはみな込められているように思います。一族の長（族長）であるアブラハムには一族みんなの生活を維持し、平和裡に守っていく責任があります。これはその自覚に基づく言葉のように思います。そのことを考えれば、こんな争い、諍いは、まったく何の役にも立たないのです。

「親類」という訳語、邦訳は他に「身内」など、伯父と甥なので、親族関係として訳しているのがほとんどのようですが、昔から（紀元前一世紀のギリシャ語訳旧約聖書〔七十人訳〕以来）、「兄弟」と訳されてきた言葉でもあります。ルター訳も現代のカトリックも、そのようです。「わたしたちは兄弟どうしだ」。この兄弟は広い意味で受け取るべきですが、それだけでなく、同じ神を信じる者どうしという意味も込められていると思います。そこには血縁関係に訴える以上のことがあります。アブラハムは年長者、しかもロトに対して父のような存在であった。しかしロトに対するアブラハムの態度はきわめて謙遜なのです。

提案された解決策は、ここで別れて互いに別の土地に暮らすことでした。その上で

アブラハムがロトに言ったのは、まずはじめにあなたが自分の住みたい場所を選ぶように、そうしてよい、残りを自分は取ろうということでした。聖書がこれを一つの模範的な行為としていることは明らかです。アブラハムの寛容な心を強く印象づけられます。

エジプトに入るときの、妻サラを妹と偽ったときの、あの臆病で、せっかちなアブラハムと何と違ったアブラハムがここにはいるでしょうか。カナンに戻って、彼の原点に、出発点に帰って、神と共に新たに歩み始めた彼の最初の信仰の見事な証しだったと受け取っていいと思います。どんな場所が与えられようと、つまりどんな運命が自分を待っていようとも、それを、彼は、神からの贈り物として、感謝して受け取ろうとしているのですから。

ロトがどのように選んだか、アブラハムがどのようにしたか、聖書はつづけて書いています。簡単に触れることしかできません。

ロトが目を上げて眺めると、ヨルダン川流域の低地一帯は、主がソドムとゴモラを滅ぼす前であったので、ツォアルに至るまで、主の園のように、エジプトの国のように、見渡すかぎりよく潤っていた。ロトはヨルダン川流域の低地一帯を選んで、東へ移って行った。こうした彼らは左右に別れた・・・（一〇～一一節）。

主は、ロトが別れて行った後、アブラムに言われた。「さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。見えるかぎりの土地をすべて、わたしは永久にあなたとあなたの子孫に与える」（一四～一五節）。

ここに示されたロトとアブラハムの選択、非常に対照的なところがあります。それを示す言葉を一つ取りあげれば、ロトは選んでいます。これに対してアブラハムは神から与えられようとしています。

ロトの選びを促したのは、彼の目であり、目に映るものでした。潤いのある低地帯を選ぶのは、ある意味当然です。水が豊富、農作には適しており、牧草地も豊かなはずです。彼の目には、それはまるで神の国のように、水の豊富に流れるエデンの園のように見えたというのです。しかし、一四章から、一八、一九章と読み進めていくと、これが大失敗だったことが明らかになります。邪悪で罪にまみれた都市、ロトのいたソドム、そしてゴモラなど、神の裁きに遭います。ロトだけは、アブラハムに免じて、破滅のただ中から救い出されることになります。このことはその時に詳しく見ることにしたいと思います。

こうしたアブラハムを、私どもはどう理解したらよいでしょうか。私はイエスの言葉を思い出します。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」（口語訳　マタイ六・三三）。エジプトから帰還し、彼の原点ベテルに帰って、アブラハムは第一に神の国と神の義を求めはじめたように思います。エジプトにおける経験は彼にいろんなことを教えたのではないでしょうか。まず神の御心がなるように求める、しかるのちに、彼に必要なものはすべて、添えて、与えられる。信仰の父アブラハムの歩みは、こうして、徐々に、確かなものとなっていくのです。

（二〇・六・二八）